opusdei.org

待降節:「目を覚まして祈ることの大切 さ」教皇、日曜正午 の集いで

教皇フランシスコは、11月28日(日)、バチカンで正午の 祈りの集いを持たれた。(バ チカン・ニュースから)

2021/12/02

カトリック教会の暦は、11月28日 (日)、主の降誕を準備する期間 「待降節」の第一主日を迎えると共 に、典礼における一年の新しい歩み を始めた。同日正午、教皇フランシスコは「お告げの祈り」をバチカンの広場の巡礼者らと共に唱えられた。 祈りの前に、教皇はこの日の福音朗読箇所、ルカ福音書21章の、時の終わりにおける主の来臨をテーマに、次のような要旨の説教を行われた。

待降節第一主日の典礼の福音は、時の終わりにおける主の来臨について語っている。

イエスは、その時起きる荒涼とした 心を騒がせる様々な出来事を予告し た後で、このようなことが起こり始 めたら、恐れるのではなく、「身を 起こして頭を上げなさい。あなたが たの解放の時が近いからだ」(ルカ 21,28)と言われる。

イエスのこの勇気づけの言葉は素晴らしいものである。すべてが終わったかと思われた時、身を起して頭を

上げるようにと言う。それは主が助けに来てくださるからである。

しかし、困難や苦しみや敗北に押しつぶされずに、頭を上げるにはどうしたらいいだろうか。これに対し、イエスはわたしたちにそのための道を示している。「心が鈍くならないように注意しなさい。[…] いつも目を覚まして祈りなさい」(同21,34.36)

キリスト教生活における「目を覚ま して祈る」ことの大切さについて えてみよう。イエスの言う目を覚ま している状態とは、気をそらせると となく、注意しているということら ある。すなわち、「心が鈍くならい あるに」、霊的生活が生ぬるい のにならないようにということで る。

霊的成長、熱心な祈り、宣教や福音 への情熱がないならば、「眠り込ん だキリスト者」になってしまう恐れ がある。そして、無気力、無関心に 陥り、楽なことにしか興味を持たな くなる。

イエスが言うように、「生活の煩い」(参照同21,34)で心が鈍くならないように、習慣に引きずられて生きないように、わたしたちは自分を見張る必要がある。

待降節入りを機会に、自分の精神を 鈍くしているものは何なのか、自 の生き方を麻痺させている生しるは何なのか、自分を地面に押しるは何なのかを は何なのかを上げることを妨げてい習慣は何なのかを、自問するの問するの間 有意義なことである。これらの思まるは、 はく無気力にしまう怠惰からてくれる。

また、「いつも目を覚まして祈りなさい」(同21,36)とイエスが言われるように、「祈り」もまた目覚めているための秘訣である。心に火を灯

し続けるのは、祈りである。情熱が 冷めそうな時、祈りは心に再び火を つけ、物事の中心である神のもとへ とわたしたちを立ち返らせる。祈り は魂を眠気から覚まし、本当に大切 なこと、人生の目的に焦点を当てさ せる。

どんなに忙しい時も、祈りをおろそかにしてはならない。短い祈りをしばしば唱えることも、心の助けにするだろう。待降節に、たとえば「主イエスよ、来てください」と祈ることを習慣にしよう。そして、い行りを心が目覚めているよう、この祈りを一日の中で繰り返そう。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <u>https://opusdei.org/ja-jp/article/</u> Taikou-Kyoukou/ (2025/10/22)